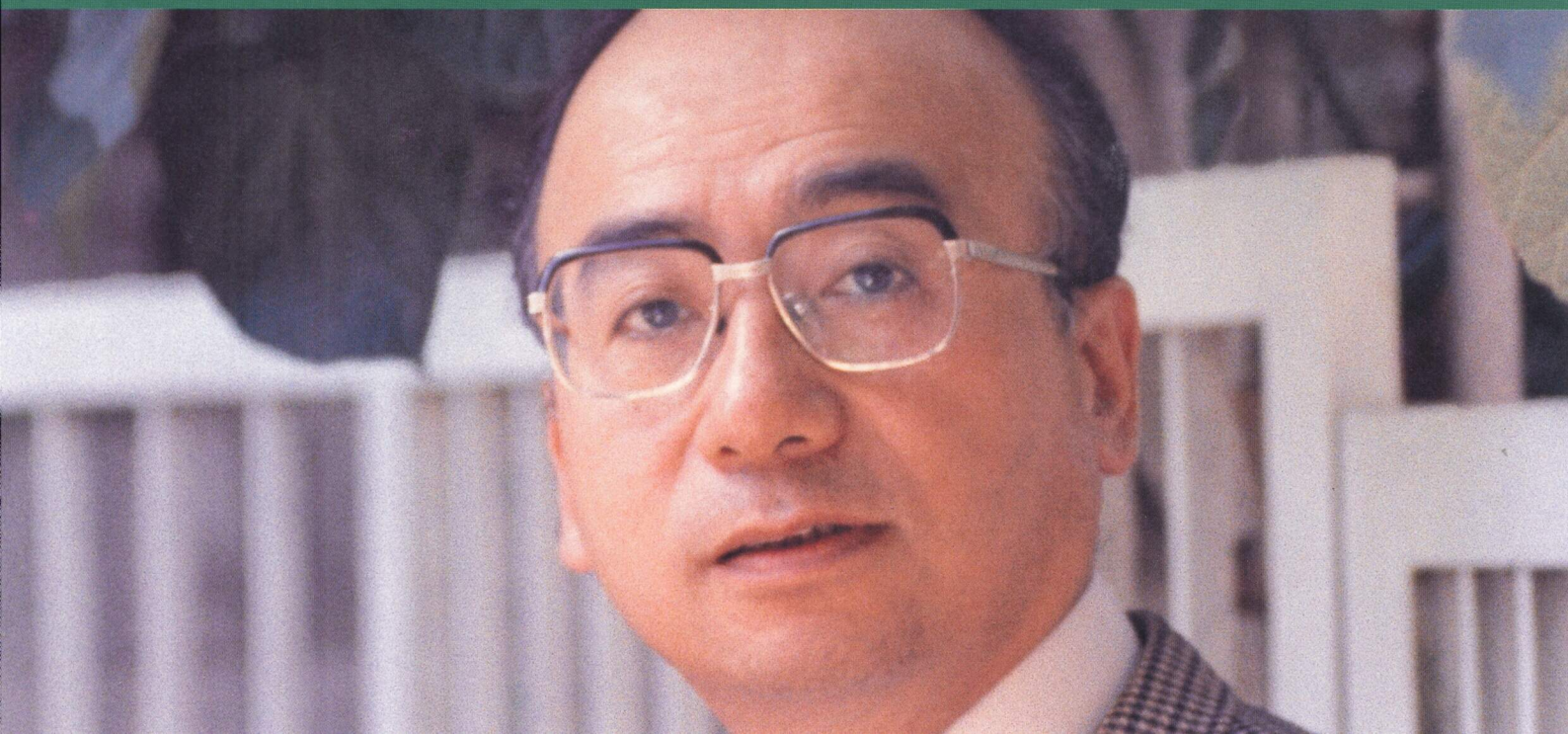
国書刊行会

西尾幹二全集

全著作を収めた初の決定版全集

全22巻



『西尾幹二全集』全巻内容

第1巻　ヨーロッパの個人主義

◆『ヨーロッパ像の転換』
◆『ヨーロッパの個人主義』
◉追補　竹山道雄・西尾幹二対談

西尾幹二の思想形成の出発点は三つある。その第一が『ヨーロッパ像の転換』『ヨーロッパの個人主義』という西欧文明体験記で、留学記録ではなく、西欧の深さに感動し、同時に日本を確認し、日本の立場を主張する自知の書。

定価　本体5800円＋税
ISBN978-4-336-05380-0

第2巻　悲劇人の姿勢

◆アフォリズムの美学
◆文学の宿命
　―現代日本文学にみる終末意識
◆不自由への情熱―三島文学の孤独
◆行為する思索―小林秀雄再論
◉追補　福田恆存・西尾幹二対談

西尾の思想形成の出発点の二番目は文学評論である。処女作「小林秀雄」、「『素心』の思想家福田恆存の哲学」、「三島由紀夫の死と私」等、悲劇人と見立てた三者の評文を第2巻に集中した。三者の価値の尺度は「真贋」である。

定価　本体5800円＋税
ISBN978-4-336-05381-7

第3巻　懐疑の精神

◆ヒットラー後遺症／政治の原理　文化の原理／自由という悪魔
◆老成した時代
◆観客の名において―私の演劇時評
◉追補　今道友信・西尾幹二対談

思想形成の第三の出発点は懸賞論文「私の戦後観」から始まった時代批判である。60年代末の大学紛争と青年の反乱への徹底批判、70年代の無気力、成熟と老成という逃避への懐疑、情報化社会への懐疑、比較文化論への懐疑。知性を欠く知能への懐疑。

定価　本体5800円＋税
ISBN978-4-336-05382-4

第4巻　ニーチェ

◆第一部第二部全一巻
◉追補　渡辺二郎・西尾幹二対談

著者の不朽の名作『ニーチェ』の完全本。観念的哲学論ではなく、ニヒリズムを具体的に生きた一人の人間像をニヒリズムの語を使わずに描出した「評伝文学の魅力に溢れた傑作」（斎藤忍随氏）である。資料広汎で学問的にも完備。

定価　本体7600円＋税
ISBN978-4-336-05383-1

第5巻　光と断崖　―最晩年のニーチェ

◆光と断崖
◆ドイツにおける同時代人のニーチェ像
◆ニーチェ『この人を見よ』西尾訳

第4巻『ニーチェ』の続篇。最晩年に仏教に心を傾けた二ーチェの謎、キリスト教の信仰が隠していた闇は露呈し、光と闇の対立のない遠い異世界のアジアに彼は何を見ていたか。『権力への意志』は幻であった。他に未刊行の重要作品収録。

定価　本体5800円＋税
ISBN978-4-336-05384-8

第6巻　ショーペンハウアーとドイツ思想

◆ショーペンハウアーの思想と人間像
◆ショーペンハウアーの現代性
◆ショーペンハウアーと明治の知性
◆ニヒリズムとしてのドイツ思想の展開
　―カントからニーチェまで
◆北方的ロマン性
　―ドイツ的根源性の原型
◆ドイツの言語文化
◆私の翻訳論
◉追補　斎藤忍随・西尾幹二対談

「ヨーロッパにおける歴史主義と反歴史主義」という別系列の論文と、愛読者の多い『ニーチェとの対話』がここに収録された。ショーペンハウアーの主著『意志と表象としての世界』の全訳は著者の業績。ここには抄録のみ。

定価　本体7000円＋税
ISBN978-4-336-05385-5

第7巻　ソ連知識人との対話／ドイツ再発見の旅

◆『ソ連知識人との対話』
◆ソルジェニーツィン氏への手紙
　―貴方は自由をどう考えているか
◆ドイツの大学教授銓衡法を顧みて／ドイツの家／技術観の比較―日本とドイツ
◉追補　内村剛介／岩村忍・西尾幹二対談

「真の自由には悪をなす自由も怠惰である自由も含まれている」は、ソ連に具現した全体主義社会への著者の批判の要諦である。本巻は1977年のロシア、80年代のドイツを歩いた小説風紀行文で、読み易く、面白い。

定価　本体7400円＋税
ISBN978-4-336-05386-2

第8巻　教育文明論

◆『日本の教育　ドイツの教育』
◆講演　日本の教育の平等と効率
◆『教育と自由』

著者の教育哲学のすべてがここにある。日独学校比較、中曽根臨教審批判、中央教育審議会委員としての中間報告から大学改革論までを総括し、少年期からの体験を踏まえ、教育の光と影を学究的に明らかにした渾身の一冊である。

定価　本体7800円＋税
ISBN978-4-336-05387-9

第9巻　文学評論

◆老成と潔癖―現代小説を読む
◆オウム真理教と現代文明―ハイデッガー「退屈論」とドストエフスキー『悪霊』などを鏡に
◆作家論：高井有一／柏原兵三／小川国夫／上田三四二／綱淵謙錠／手塚富雄／江藤淳／石原慎太郎
◉追補　桶谷秀昭／江藤淳・西尾幹二対談

『平家物語』の世界、『徒然草』断章形式の意味するもの、人生批評としての戯作、本居宣長の問い、明治初期の日本語と現代における「言文不一致」、漱石『明暗』の結末、芥川龍之介小論、ほか現代作家論、文芸時評等。第2巻以外の文学論を一括した。

定価　本体7800円＋税
ISBN978-4-336-05388-6

第10巻　ヨーロッパとの対決

◆異文化を体験するとは何か／漱石の文明論と現代／横光利一『旅愁』再考
◆戦略的「鎖国」論
◆講演　知恵の凋落
◉追補　入江隆則／西部邁・西尾幹二対談

世界に中心軸はなく西欧は閉鎖社会であるのに、西欧の尺度が国際社会を圧倒している不健全に対し、著者はドイツの講演会で近代日本の真価を訴え、パリ国際円卓会議で論争し、シュミット元独首相の政治的偏見にも挑戦した。

定価　本体7800円＋税
ISBN978-4-336-05389-3

第11巻　自由の悲劇

◆フランス革命観の訂正
◆ロシア革命、この大いなる無駄の罪と罰
◆ソ連消滅―動きだす世界再編成と日本
◆ギュンター・グラスと大江健三郎の錯覚
◆『自由の悲劇』
◆『「労働鎖国」のすすめ』

共産主義の終焉は自由の勝利のはずだが、そこに自由の「悲劇」を見た著者は、現代世界の民族宗教対立を洞察し、わが国への移民導入の危険をいち早く予言した。ロシア革命の無意味化はフランス革命観を変え、近代の意味を変えた。

定価　本体7400円＋税
ISBN978-4-336-05390-9

第12巻　全体主義の呪い

◆『全体主義の呪い』
◆ヴァイツゼッカー独大統領謝罪演説の欺瞞
◆『異なる悲劇　日本とドイツ』がもたらした政治効果とマスコミへの影響

ベルリンの壁崩落後のチェコ・ポーランド、東独で哲学者や言論知識人と「自由」をめぐる徹底討論を交した。それを踏まえてヴァイツゼッカー独大統領の謝罪演説の欺瞞を突いた『異なる悲劇　日本とドイツ』は大きな反響を呼んだ。

【近刊】
ISBN978-4-336-05392-3

第13巻　日本の孤独

◆〝あの戦争〟を他人事のように語るな
◆近代戦争史における「日本の孤独」
◆ニュルンベルク裁判の被告席に立たされたアメリカ

日米構造協議や湾岸戦争処理における米国の圧力、敗戦に呪縛され続ける日本人。著者は米国を他者として突き離すことを訴え、欧州戦線とは異なる日米戦争の背景を探り、近代戦争史における日本の孤独を覚悟せよと説く。

【近刊】
ISBN978-4-336-05391-6

第14巻　人生論集

◆『人生の深淵について』
◆『人生の価値について』
◆『人生の自由と宿命について』
◆『男子、一生の問題』

評論家の小浜逸郎氏曰く「西尾はモンテーニュやパスカル、ラ・ロシュフコー、キルケゴール、小林秀雄、福田恆存等のモラリストの系譜に連なる人間観察力、心理洞察力を持つ倫理思想家」。人生の価値、自由、宿命について他。

定価　本体7400円＋税
ISBN978-4-336-05393-0

第15巻　わたしの昭和史

◆『わたしの昭和史』二分冊

西尾幹二の少年記二分冊。学齢前の日米開戦、学童疎開、艦砲射撃から逃れて山奥へ再疎開、美しい田園生活、詩や小説を書く自我の目覚め、終戦、マッカーサーの日本への懐疑、抑留帰国者がソ連万才を叫ぶのを見ての14歳の懐疑。初恋。

【近刊】
ISBN978-4-336-05394-7

第16巻　沈黙する歴史

◆世界戦争を悲劇的にしたリンカーンの正義の戦争観
◆米国は日本攻略を策定していた
◆焚書、このGHQの思想的犯罪
◆全千島列島が日本領

歴史には沈黙している部分がある。沈黙しつつ声を発している。簡単には言葉にならないが、外から言葉を与えられると不服従を示す。敗者にも正義の思いがある。先の大戦の歴史は日本人にとって自尊心の試練の物語である。

【近刊】
ISBN978-4-336-05396-1

第17巻　歴史教科書問題集成

◆ついに証明された日韓政治決着の悪質さ
◆売国官庁外務省の検定不合格工作事件
◆公立図書館の焚書事件、最高裁で勝訴
◆受験生が裁判所に訴え出た大学入試センター試験日本史の問題

著者は「新しい歴史教科書をつくる会」の初代会長として中国韓国、外務省、左翼テロ集団の妨害工作と戦い、教科書記述から採択まで運動を牽引した。その全発言を集成。「つくる会」の目指したのは常識の確立にすぎないと語る。

【近刊】
ISBN978-4-336-05395-4

第18巻　決定版　国民の歴史

◆大型付録二、参考文献一覧ほか

日本の歴史は中国や西洋から見た世界史の中にではなく、どこまでも日本から見た世界史の中に位置づけられた日本史でなくてはいけない。その信念から書かれた日本通史の試みで、72万部のベストセラーとなった。

【近刊】
ISBN978-4-336-05397-8

第19巻　日本の根本問題

◆歴史と自然、歴史と科学、言語と神話
◆皇太子さまに敢えて御忠言申し上げます

古代日本人の霊魂観を縄文の森の生態系の中に求める著者は、古代史の扱い方への疑問や危機に立つ神話を論じ、現代の皇室の苦悩と困難についても発言してきた。憲法前文私案、憲法をめぐる参議院での意見陳述等を付す。

【近刊】
ISBN978-4-336-05398-5

第20巻　江戸のダイナミズム

◆本居宣長が言挙げした日本人のおおらかな魂
◆中国神話世界への異なる姿勢
　―新井白石と荻生徂徠
◆転回点としての孔子とソクラテス

地球上で歴史意識を有するのは地中海域、支那大陸、日本列島の三つで、西洋古典文献学、清朝考証学、江戸の儒学・国学は、古代を近代に取り戻す言語文化ルネサンスで、古い神の廃絶と新しい神の創造を目指す精神運動だった。

【近刊】
ISBN978-4-336-05399-2

第21巻　真贋の洞察

◆自由の涯には破壊しかない
◆日米軍事同盟と米中経済同盟の衝突
◆中国の米国化、米国の中国化
◆日米は中国に阿片戦争を仕掛けた？

保守は人間の生き方であって概念ではない。政治的な左右の対立にも関係がない。ニューヨーク同時多発テロから中国の台頭、世界の金融危機、グローバリズム、揺らぐ主権国家の中で何が真贋か、迷いを絶つ道を説く。

【近刊】
ISBN978-4-336-05400-5

第22巻　日本人のスピリットの復活

◆天皇と原爆
◆戦争史観の転換―五百年史試論

米国に封印されている日本はこのままいけば「戦後百年」というおかしなことになる。平和と繁栄の中で少子化、親子殺人、格差増大、内向きの政治外交力の低迷が続く。先の大戦は「宗教戦争」であったという認識の修正が必要だ。

【近刊】
ISBN978-4-336-05401-2

月報執筆者

源了圓　加賀乙彦
岡田英弘　石原萌記
三浦朱門　天野郁夫
桶谷秀昭　竹内洋
田久保忠衛　坂本忠雄
山下善明　富岡幸一郎
中嶋嶺雄　入江隆則
清水真木　武田修志
早川義郎　大橋良介
小浜逸郎　高辻知義
中島義道　三橋貴明
岩﨑英二郎　加地伸行

巻末対談者

竹山道雄　内村剛介
福田恆存　江藤淳
今道友信　桶谷秀昭
渡邊二郎　入江隆則
斎藤忍随　西部邁
岩村忍

推薦文より

澁澤龍彦氏 ――「不自由への情熱――三島文学の孤独」

三島さんの自決の問題が謎みたいに言われているけれども、これはぼくに言わせれば、世間で受け取られている常識的見解に反して、意外に単純な問題なんです。深いけれども単純なこと、おそろしいほど単純なことですね。ずばりと言えば、まさにニヒリズムとラディカリズムの問題で、それ以上でもそれ以下でもない。（中略）左翼の中にも三島さんの共鳴者が多くいるのは、当たり前のことでしょう。随分色んな人が三島論を書きましたが、このことをはっきり問題の焦点として見据えた人は、ぼくの知っている限りでは、西尾幹二さんだけだったようです。この人は三島文学の愛好者でもないし、まことに穏健な思想の持主らしいんですけれども、ふしぎなこともあればあるもので、少なくとも問題の核心をつかんでいましたね。ぼくは敬服したおぼえがあります。（「日本読書新聞」昭和四十六年十二月二十日）

中島義道氏 ――「西尾さんについて」

西尾さんは真面目な人であり、正攻法が好きな人である。
姑息な手段で勝つことを最も嫌った人である。
西尾さんは、失点がないというだけの利点しかない人を嫌った。
みずからを危険な場に晒さないで、
安全無害なことばかり語る学者たち、裏で取り引きする人々を嫌った。
つまり、人間としての「小ささ」を嫌った。これは、そのままニーチェの人間観に繋がる。
……西尾さんは、みずから正しいと信ずることを、身体を張って主張し、
一歩も譲ることがない。それはある（賢い）人々には愚直にも見えるであろうが、
私にはこれが先生の一番好きなところだ。（西尾幹二全集第6巻「月報」より）

梅原猛氏 ――『ヨーロッパの個人主義』書評より

ここで西尾氏は、何よりも空想的な理念で動かされている
日本社会の危険の警告者として登場する。
病的にふくれ上がった美しい理念の幻想が、今や日本に大きな危険を与えようとする。
西尾氏の複眼は、こうした幻想から自由になることを命じる。（中略）
西尾氏は、戦後の日本を支配した多くの思想家とちがって、
何げない言葉でつつましやかに新しい真理を語ることを好むようである。
どうやらわれわれは、ここに一人の新しい思想家の登場を見ることができたようである。
（「潮」昭和四十四年四月号）

三島由紀夫氏 ――『ヨーロッパ像の転換』推薦の辞より

西尾幹二氏は、西洋と日本との間に永遠にあこがれを以て漂流する古い型の日本知識人を脱却して、西洋の魂を、
その深みから、その泥沼から、その血みどろの闇から、つかみ出すことに毫も躊躇しない、新しい日本人の代表である。
西洋を知る、とはどういふことか、それこそは日本を知る捷径ではないか、
……それは明治以来の日本知識人の問題意識の類型だったが、今こそ氏は「知る」といふ人間の機能の
最深奥に疑惑の錘を垂らすことも怖れない勇気を以て、西洋へ乗り込んだのだった。
これは精神の新鮮な冒険の書であり、日本人によってはじめて正当に書かれた「ペルシア人の手紙」なのである。

推薦文より

坂本多加雄 氏（政治学者）

著者の言論人としての活動を導いているものは何か。
それは、おそらく、「なにものかに動かされたかのごとく、当時の世人の意に逆らう恐るべき真実を次々と言葉にするしかなかった『運命』」であろう。
これは、著者自身がマキャヴェリと韓非を論じた文章の一節にみられる言葉である。
本書は、そうした著者、西尾氏の「運命」から紡ぎだされた貴重な一冊に他ならない。

『異なる悲劇　日本とドイツ』（文春文庫　解説より）

草柳大蔵 氏（評論家）

私は西尾幹二さんという学者が好きだ。『ヨーロッパの個人主義』以来の愛読者の一人である。
自己顕示か、さもなくば八方美人が群居している日本の論壇の中で、
この人だけは自分にも大衆にも顔をむけず、「現実」に顔をむけている。
おどろくべき数の「現実」から真実を読み取り、
それを適切な言語にかえて論文を書き、メディアでの発言を続けている。
その知的エネルギーはたいへんなもので、西尾さんの著書を読みはじめると、
まるで超特急の列車に乗ったかのように、思考の途中下車ができなくなってしまう。

『「労働鎖国」のすすめ』（光文社　推薦の辞より）

坂本忠雄 氏（元「新潮」編集長）

「新潮」は戦前は文壇雑誌そのものだったが、戦後の再出発に当たって
昭和21年の坂口安吾「堕落論」を皮切りに、文学を詩・小説・文芸評論の枠から広げ、
文学の文章によってその時代の文化の精髄を読者に伝える役割も果たしてきた。
西尾さんが敬愛する小林秀雄、福田恆存、田中美知太郎、竹山道雄等の後を引継ぎ、
この新しい領域を次々に切り拓いたことを、私は同世代の編集者として心から感謝している。

（西尾幹二全集第9巻「月報」より）

西尾幹二 略歴

昭和　十　年（一九三五）◆ 七月二十日東京生
昭和二十九年（一九五四）◆ 都立小石川高校卒
昭和三十三年（一九五八）◆ 東京大学文学部ドイツ文学科卒
昭和三十六年（一九六一）◆ 東京大学大学院人文科学研究科修了、文学修士
職歴　静岡大学講師、ミュンヘン大学客員助手、電気通信大学助教授を経て、
昭和五十年（一九七五）同大学教授、現在同大学名誉教授
昭和三十八年（一九六三）◆ ドイツ語学文学振興会賞
昭和五十四年（一九七九）◆ 東京大学より文学博士、題目は「初期のニーチェ」
平成　六　年（一九九四）◆ 第10回正論大賞
平成二十七年（二〇一五）◆ 瑞宝中綬章受勲

西尾幹二全集

全22巻

A5判・上製・貼函入
各巻平均 450〜700頁・本文組 13級2段組
価格：各巻 5,800〜8,000円

帖合・書店印

全22巻 ……（　　）セット
第（　）巻 ……（　　）冊
内容見本（パンフレット）……（　　）部

お名前　　お電話

ご住所

※必要事項をご記入のうえ、書店へお渡しください。

国書刊行会　〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15　TEL: 03-5970-7421　FAX: 03-5970-7427　MAIL: sales@kokusho.co.jp　http://www.kokusho.co.jp